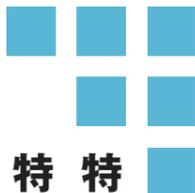




2010いわて国際交流

Vol.69

平成22年3月発行 2010いわて国際交流 Vol.69 (財団法人岩手県国際交流協会機関誌) http://www.iwate-ia.or.jp/ E-mail:kikanshi@iwate-ia.or.jp



特集② 協会設立20周年
特集① スポーツを通じた国際交流



あなたも賛助会員になりませんか

皆様からの会費は国際交流・国際協力に役立てられます。

会員の特典

- ①協会の発行物をお届けします。
情報紙「国際交流情報紙jien go」(隔月)、機関誌「いわて国際交流」(年1回)
*学生会員の方は、情報紙に替えてメールマガジンでの情報発信となります。
- ②協会の催しなどの案内をいち早くお届けします。イベント、セミナー、講座等の参加費が割引になります。
- ③賛助会員限定のイベントを開催いたします。
- ④旅行会社の国内外の企画商品が割引価格になります。詳しくは、提携旅行会社のガイド「旅行優待マップ」をご覧ください。
- ⑤エスニックレストランで各種サービスが受けられます。詳しくは、提携レストランのガイド「エスニックレストランマップ」をご覧ください。

年会費

- ①個人会員…1口 3,000円
 - ②団体会員…1口 10,000円
 - ③学生会員…1口 1,000円
- 協会所定の振込用紙で、指定の銀行よりお振込みいただく
と手数料はかかりません。協会窓口でも受け付けいたします。



平成22年3月に行われた賛助会員限定イベント
「賛助会員サロンーワインを楽しむための12のヒント(基礎編)」
講師は松田幸さん(ワインバー アッカトーネ オーナーソムリエ・盛岡市)

寄付のお願い

協会は、民間の立場から国際交流・協力・多文化共生を通して地域の発展や活性化に寄与して参ります。協会の活動を継続的に発展させていくためには、協会の財政基盤の充実を図ることが必要であり、趣旨をご理解いただき、ご協賛をよろしくお願い申し上げます。

※協会は、「特定公益増進法人」の認定を受けており、寄付をされた方は税法上の損金算入や寄付金控除が認められます。

編集後記

- ▶宮古のヨットハーバーには、時々ヨットで世界を旅している外国人たちがフラッと立ち寄るそうです。そんな時、地元のヨットクラブの人たちは旅人を焼き鳥屋などに招待してヨット談義で盛り上がるとのこと。世界とつながっている岩手のスポットを発見して、ちょっとうれしくなりました。(H)
- ▶毎年、機関誌取材を通じて岩手の様々な物・事・人を知ることが出来るのは、自分にとって大きな収穫です。機関誌を手にして読んでくださる方々が喜ぶ内容になるよう、これからがんばってまいります。(M)
- ▶2度の取材を経て、マリンスポーツや日本語教室など、岩手県で国際交流を通じた様々なドラマがあったことが感じられました。私は編集委員として初めての参加でしたが、今後も国際交流の素晴らしいドラマを記事で表現していきたいと思えます。(遠藤)
- ▶岩手の新しい野球人の息吹に触れた。彼らの心はすでに地球規模のサイズだった。(O)
- ▶剣道素人なので剣道の説明を伺いながらの取材でした。「剣を交えて愛を知る」とタイトルにつけましたが、これは記事作成時に拝読した遠野剣道会のサレルノへの記録誌に「交剣知愛」とつけられていたタイトルが個人的に気に入って、そこからお借りました。(ポ)
- ▶人と人がつながるのは、小さなきっかけから。それが世界へとつながり、また個人と個人のつながりになる。夢が膨らむお話しに、胸が高鳴りました。(たあ)
- ▶「人間力」の高い方々が岩手にこんなにもたくさんいるのだと実感します。不安なことばかりが目につきますが、それだけではないと心強く感じました。(mo)



イラスト/菅原 優

国際交流センター(アイーナいわて県民情報交流センター5F)

■開館日/毎日 ■開館時間/9:00~21:30 ■休館日/年末年始

アクセスマップ

- 交通のごあんない
- ・JR盛岡駅から徒歩4分(東西自由通路経由)
- ・東北自動車道盛岡ICから車で8分



[編集]いわて国際交流編集委員会
 [編集長]大山美和
 [編集委員]遠藤早苗/大森不二夫/小牧朋広/谷藤厚子
 長岡美和子/林裕/平牛まゆみ
 [発行]財団法人 岩手県国際交流協会
 〒020-0045 盛岡市盛岡駅西通一丁目7番1号
 TEL.019-654-8900 FAX.019-654-8922
 [印刷]山口北州印刷株式会社
 〒020-0184 盛岡市青山4丁目10-5
 TEL.019-641-0585 FAX.019-648-1026

※本誌掲載の記事、イラスト・写真の無断転載、複写を禁じます。

スポーツを通じた国際交流

オリンピック、ワールドカップからアマチュアの草野球までスポーツは国や言葉を越えて世界の人々の共通の関心事。今回はスポーツを通じて海外との交流を深めている団体や、県内で外国人とのネットワークをつくり上げているクラブチームなど、スポーツを通じた国際交流を特集します。

岩手から直接世界に!

2009年夏の甲子園大会で県勢90年振りのベスト4進出の快挙を成し遂げた花巻東高校硬式野球部。何度も逆転劇を繰り広げ、岩手人に希望と勇気、そして感動を与えてくれました。同部を率いる佐々木洋監督から従来の岩手チームと一味も二味も違うチームづくりや日本野球の世界への展望について語っていただきました。

県人選手だけで日本一を

花巻東高校野球部の監督に就任したとき、日本一のチームになり全国優勝することを目標にしました。しかも岩手の選手だけで、絶対に優勝することを考えました。岩手の選手を見てう思いました。他の高校の野球選手と比べて遜色がありません。確かに、これまで岩手の選手は、甲子園に出場しても初戦を飾れず、負けることが多かった。岩手人の人の良さ、優しさ、謙虚さが出すぎていました。人が良すぎて、吞まれてしまっていた傾向がありました。グラウンドのときだけでも、何かいい意味での「きかん気」を發揮していれば、違っていたと思うのですが。私は高校野球の指導者であり、プロ野球の指導者とは違います。ただ勝つだけではないです。もちろん、勝つことも必要ですが、人間づくりも大切です。最近社会では、大変な出来事が増えていきます。自殺者も多く、殺人事件も増え、いじめや不登校なども後を立ちません。野球に限らず、スポーツに励むことが、最後の砦になる気がしています。

野球もできる立派な人間に

生徒に伝えることは、目標を持つこと、がまんすること、そして他人と協力することなどです。野球は人生で大切なことが何かを教えてください。その差を痛感しました。ただ日本の野球の方が技術力が高いと感じました。スピードでは適わないが、技術的に通用する野球をして、頑張っています。スピードをかわす能力が長けています。日本人の技の高さですね。

コーチングもいい参考になりました。アメリカのコーチングの特徴は、教えすぎないことです。教えるタイミングを重視しています。日本は、教えすぎな点があります。両方の良い所を生かしたコーチングを考えたいと思います。

岩手から世界に羽ばたく

何事も日本の島の中だけで考える時代ではありませんね。地域や国の垣根越えて、動く時代です。ビジネスも世界を舞台に行なわれていますね。松井、イチローらは世界レベルで活躍し

ういう意味では、野球の指導だけでなく、教育面の指導も必要です。野球でも、教育でも指導者はプロにならなければと思います。一つ信念にしているのは、野球選手を育てるのではなく、野球もできる立派な人間を育てることです。野球だけできるロボットを生産するために指導しているのではありませぬ。監督がする肝心なことは、やる気を起こすことです。

生徒には目標設定の時間を割きました。いかにやる気にさせるかを考え、モチベーションづくりを重視しました。野球での目標設定、勉強での目標設定、そして人生での目標設定をしています。先にゴールを作れと言っています。そのために、今、何をすべきか考える。考える力を身に付けさせたいと思っています。

日米親善野球に出場して

アメリカ滞在中、毎日毎日岩手の人が増え、びっくりしました。とても優しく、人の温かさを感じました。甲子園での活躍を見てたよと何度も声を掛けられました。海の向こうでの歓待はうれしかったですね。どの県の人より、岩手の人が一番多く来てくれました。

アメリカの野球はパワーが違います。投げる球のスピードが全然違いました。打ったボールの飛距離も違う。飲み物も食べ物もワンサイズ違い、パワーの差を痛感しました。ただ日本の野球の方が技術力が高いと感じました。スピードでは適わないが、技術的に通用する野球をして、頑張っています。スピードをかわす能力が長けています。日本人の技の高さですね。

アメリカの野球はパワーが違います。投げる球のスピードが全然違いました。打ったボールの飛距離も違う。飲み物も食べ物もワンサイズ違い、パワーの差を痛感しました。ただ日本の野球の方が技術力が高いと感じました。スピードでは適わないが、技術的に通用する野球をして、頑張っています。スピードをかわす能力が長けています。日本人の技の高さですね。

アメリカで感じたこと

2009年日米親善野球大会に初出場した花巻東高校硬式野球部の柏葉康貴君と猿川拓朗君に話を聞きました。

柏葉康貴君

(盛岡市出身。二塁手。明治大学進学)

技術面のほか、人間性を高めることの大切さを学びました。勝ちたいと思う気持ちを持ちつづけることが大事なことも。アメリカでは、ダイナミックな野球を体感しました。バッターは思い切り振ってきます。試合では日本らしい野球も見せられ、有意義な経験をしました。食事の量や肉料理が多いこと、体の大きさが違うことにも驚かされました。体づくりに取り組む必要を感じました。大学ではしっかりレギュラーをとり、またアメリカでプレーしたい。

猿川拓朗君

(盛岡市出身。三塁手。東海大学進学)

諦めないこと、努力すること、生き方を学びました。アメリカでは高校生も日本と同じで技術を高めるための向上心が盛んでした。年齢に関係なく学ぼうとしている人も多くいました。これからは、大学では野球を頑張り、日米大学野球の代表選手に選ばれ、また海の向こうでプレーしたい。今度は、通じる英語を話したい。

菊池雄星君からも話を聞きました

菊池雄星君

(盛岡市出身。投手、西武ライオンズに入団、背番号17)

海外でプレーしたい気持ちは、高校に入ったところから強くなりました。メジャーで活躍する日本人選手が増え、活躍をテレビなどで観戦し、憧れていました。海外からメジャーのスカウトが来たときは、本当に驚きでした。夢を持ち、野球を続けていて、よかったと思います。夢は諦めない。夢を諦めるのは自分自身。これからの若い岩手人には、夢を持ち、世界に羽ばたいてもらいたいです。日本人、岩手人としての誇りを持って。自分は、若い岩手人に、憧れられるような人間になりたいです。

佐々木 洋さん

(花巻東高校硬式野球部監督)

北上市出身。黒沢尻北高、国士舘大学卒業。横浜隼人高コーチなどを経験後、01年から現職。09年の春の選抜では、県代表として初の準優勝。同年9月、ロサンゼルスで開催された日米親善野球大会に日本代表コーチとして参加。34歳。



写真(左)佐々木監督 (中)猿川選手 (右)柏葉選手

ヨットを通じた国際交流

宮古市のNPO法人「いわてマリフィールド」は青少年の国際交流事業として、毎年、ニュージーランドへのセイリング研修を行っています。ヨットの技術、環境学習、そして豊かな生活様式と、ニュージーランドのヨットクラブから学ぶことは多岐に渡ります。

写真上/ヨットが私たちの共通語。セイリングの技術、環境の大切さとニュージーランドから学ぶべき事は多い
写真下/理事長 橋本 久夫さん



メンバーは小学5年生から高校2年生まで7人でした。すべて地元のジュニアでやっている宮古の子どもです。お金もなかったのに、子どもたちはすべて地元のヨットクラブのメンバーの家にホームステイさせてもらいました。ヨットの用語は基本的に英語なので、研修自体はスムーズに行きました。またホスト宅に帰ると「今日のセイリングはどうだった」という話になるし、朝出かける時も「今日はいい風が吹いているよ」と見

交流のきっかけは2003年「国際スポーツ指導員」のヨットのコーチとしてニュージーランドの大学生、スチュアート・イネス君が宮古にやってきたことでした。夏から指導を始めたのですが、日本の事情にも慣れてきて、これから本格的にやろうというときにシーズンオフ。そこで彼のほうから「日本はこれから冬だけど、ニュージーランドは夏になる。だったらみんなでニュージーランドに研修にいかないか」と提案してきました。いわてマリフィールド設立当初から国際交流も活動のひとつと掲げていたので、まさに渡りに舟という感じで、二つ返事で「よし、やろう」となったのです。それから急ぎ、準備を始め、翌2004年の1月に出発しました。

2回目の研修には女子のオリンピック選手がコーチとして来てくれました。そのとき参加したのは半数が高校生で、彼らは日本に帰ってから国体やインターハイで活躍してくれました。いろんな経験が彼らを成長させていったのだと思います。研修に参加した子で、現在ニュージーランドに留学している子もいます。

またニュージーランドから宮古への研修も行っています。こちらは2年に一回ですが、今年宮古に来た一人はワールドユースの選手



バットの生る木に夢をのせて

紫波町でスポーツ用品店を営む原修さんは、世界的に枯渇する野球のバット材料のアオダモの植栽活動にたった一人で9年間、取り組んできた。これを知ったオーストラリア在住のデニー丸山(丸山傳)さん(盛岡市根田茂出身)と交際が始まり、丸山さんの働きかけで豪州野球チームが来県するなど「アオダモ交流」が始まりました。

写真上/県営野球場でのアオダモ記念植樹 ©フォトスタジオ・ナチュール
写真下/(左)副会長 長山吉志さん (右)会長 原修さん

「アオダモの会」の誕生

原修さんは私財を投じて借りた土地に地道に苗を植え続け、これまでに植えられたアオダモは、実に1万5千本に及びます。下刈りから何から全て自分でこなし、とても手間のかかる作業で、実際にバットとして使えるようになるまでには70年近くかかる、大変気の長い活動と言えます。

原さんの地道な植林活動を偶然、新聞で知ったのがデニー丸山(丸山傳)さんです。丸山さんは20代半ばで渡豪、実業家として成功したのち、野球振興のためにボランティア活動を続けてきました。2008年には30年にわたる野球

振興への功労を認められ、オーストラリア野球連盟の「ベースボール・オーストラリア・ダイヤモンド・ワード」の最も権威のある会長賞を日本人初として受賞しました。「野球を通じて国際交流」を行っている丸山さんは、原さんの生き方や活動に胸を打たれ、来日時に訪ねてきました。さらに、その原さんを応援し、植林活動を広めていこうと県内の野球関係者が集まり、「岩手のアオダモを

育てる会」(原修会長)が昨年春に設立され、活動へのサポートが始まりました。

評価された岩手の交流

2009年5月、丸山さんが顧問としてオーストラリア野球クラブ選抜のオーストラリアン・プロヴァンシャルチームを率いて来日、岩手を皮切りに約1ヵ月間、新潟や群馬など全国各地での交流試合が実現したのです。オーストラリア野球連盟では毎年選抜チームを国際親善のために海外派遣しており、昨年は日本が選ばれたことから、この交流試合が可能になりました。

最初の滞在地岩手では、富士大学、盛岡大学、J.R盛岡、フェズント岩手との交流試合のほか、少年野球教室の開催、以前から丸山さんと交流のあった川目小学校との交流会と各年代層で触れ合えるスケジュールが用意され、最終日には岩手県営野球場で子どもたちや野球関係者を交えたアオダモの記念植樹をしました。通訳には盛大生、交流試合などの写真撮影は県立大生がボランティアで参加するなど、心のこもった交流になりました。帰国後に彼らが政府や関係各所への報告をする中で、岩手が高評価を得たそうです。選手た

で、ここに来る前にブラジルの大会に出場していたそうです。そうやって世界を転戦している選手が宮古に来るようになるのはすごいことです。

子どもたちの研修もだいたい一巡したので、今後は大人の交流も行っていきたいと思っています。次の我々の活動の参考になるプログラムを勉強したり、ビジネスの交流にまで広げたいという希望もあります。ヨットクラブのメンバーにはさまざまな職業の方がいます。例えば、今年宮古にきた人は花き農場のオーナーでした。彼から「日本の花は高いね。私の花をコンテナで送るから花の輸入をしてみないか」という提案もありました。こんな話になるのもお互いヨット仲間という信頼感があるからこそ。そうやって基金を蓄えていってそれをまたNPO活動の支えにしていければと思っています。

■岩手のアオダモを育てる会

2009年4月設立。アオダモの苗木を植林し、資源保護と自然環境の保全に貢献する活動を展開すると同時に、野球界に長期安定的にバット材を提供できる体制をつくる事を目的とする。会長は原修さん。顧問は吉田洋治さん、デニー丸山さん。

「岩手のアオダモを育てる会」は、設立2年目の今年を基盤強化の年と位置づけ、広く活動の認知を図っていくそうです。「育てる会」副会長の長山吉志さんは「アオダモの植樹は野球のみならず、地球温暖化対策、青少年への環境教育にも役立ちます。未来のためにも続けていく体制を整えたい」と言います。会長の原さんは「やがて植えた木がバットになることを楽しみに孫の代へ夢を託しています」と、笑顔で語る姿が印象的でした。

次世代への夢

■NPO法人 いわてマリフィールド

マリンスポーツの普及を目指し、各種教室やイベントを開催する。今回紹介した国際交流事業のほか、シーカヤック教室、ヨットやカヤックの出前講座、自然環境保護活動などを行っている。

岩手の外国人が始めたクリケット交流

2006年、盛岡に東北初のクリケットチームができました。在住外国人が立ち上げたこのチームが呼び水になって日本ではまだなじみの薄いスポーツを愛好する人たちの輪が東北各地に広がっています。クリケットを懐かしむ人たちや、新たなスポーツに関心を持つ日本人との多国籍交流の場としても大切な役割を担っているようです。

写真上/ウィケット(3本の棒)に球が当たると打者がアウト。打者は防御のために打撃する。
写真下/広報マネージャー ディーン・ルツラーさん



「盛岡クリケットクラブ」がスタートしました。活動開始から4年程ですが、これまでに19カ国(アルゼンチン、オーストラリア、ニュージーランド、トルコ、中国など)、50人以上の外国人や日本人が参加しています。いまも参加者の半数は外国出身者と、国際色にあふれています。参加者には全く初めての人もいますので、安全性を考え、試合や練習にはやわらかいボールを使っています。これまでに一人のけが人も出ていないことを誇りに思っています。

盛岡クリケットクラブができるまで、東北には日本クリケット協会に登録されたチームがありませんでした。多分、クリケ

ットチーム自体なかったと思います。当クラブの設立の話が東北にいた外国人などに広がり、ここ数年で仙台、秋田でもクラブが立ち上がりました。さらに、福島でもチームができてくるなど、東北各地にこのネットワークが広がってきています。これらのチームと東北大会で競い合っています。2009年には、仙台、秋田に勝ち、盛岡クリケットクラブが東北のチャンピオンになりました。前年度チャンピオンのホームで大会を開催することになったので、今年の東北大会は盛岡で行われます。なかなかクリケットの試合を見る機会もないでしょう。ぜひ試合に足を運んでもらいたいと思います。

クリケットの普及、試合を楽しむことのほかにも大切に行われていることがあります。それはいろいろな国籍の外国人同士、また日本人との交流です。そのため、練習の後には親睦のためのバーベキューを必ず行っています。クリケットという共通項があることで、みんな楽しみながら交流ができるようです。バーベキューに参加するためだけに来る人もいます。各国の参加者の中には、宗教上の理由などで肉を食べられない人もいま



剣を交えて愛を知る

遠野市と姉妹都市提携を結ぶイタリア南部のサレルノ市から剣道を指導してほしいとの話があり、2005年に遠野周辺の剣士9名が派遣されました。市町村レベルでは珍しい剣道の交流で指導した菊池長悦さんと菊地和弘さんは、参加者たちの熱意に驚かされたと言います。

写真上/イタリア中から集まった剣道ファン
写真下/真剣に学ぶ参加者

イタリア国内では剣道は盛んですが、サレルノの水準はさほど高くはありません。そこで、お役に立てるならと遠野剣道会を中心に指導者を集めて行くことにしました。実際に行ってみると、事前に聞いていたより遥かに参加者が多くて驚きました。聞いてみればイタリア全土から集まってきたということです。元ナショナルチーム代表選手もいました。本来、国全体の選手の指導や交流は国同士で行うもの。一都市から派遣された私たちだけで行いきれるものではありません。しかしせっかくの機会ですので、習熟度別に分けて稽古をすることにしました。

剣道を教えるといっても、サレルノの人たちは剣道だけをやっていくわけではありません。柔道、合気道、空手など「武道」の一環として剣道を行っているという人がほとんどです。服装も防具をつけていはいはいいほうで、空手着、柔道着という人もいました。剣道の道具は現地では高価でそろえるのも大変です。竹刀などの消耗品も日本の何倍もしま

すし、竹刀のつばを止めるゴムでさえサレルノではなかなか手に入りません。会場にしても剣道場がないため体育館で稽古をしました。普通の硬いバスケットコートですので、すり足をするだけでも膝に負担がかかります。稽古は3日間行いましたが、終わったときには体がほろほろでした。

レベルは本当にいろいろでした。参加者たちは日本から指導者が来るという機会を最大限に活用しようとして、とにかく真剣でした。剣を交えること以外にも礼を尽くすことも手抜きをしません。日本人より立派に見えるほどでした。日本では稽古の合間に簡単な手合わせを行うのですが、珍しいものだからか皆真剣に見ていました。

剣道の形や礼の仕方など表面的な部分は身に付いていると思いますが、それだけでは上達するのは難しいです。剣道が上達するためには基本的な練習だけではなく、試合をして駆け引きを身に付け、相手の動きを予測したりすることが不可欠です。このような精神面での修養は力のある指導者が教えたほうがいいのですが、残念ながらサレルノにはそのような指導者

全土から集まる参加者

熱心な学びの姿勢

■遠野市とイタリア・サレルノ市の姉妹都市交流

映画『遠野物語』(村野鉄太郎監督、1982年)が第35回サレルノ国際映画祭でグランプリを取ったことが縁となり、1984年から遠野市とイタリア・サレルノ市の姉妹都市交流が始まりました。以来、文化交流を通して親善を深めています。姉妹都市締結25周年にあたった2009年のサレルノ市訪問では、翌年の遠野物語発刊100周年にちなみ、遠野の「語り部」の文化を紹介しました。2005年にはサレルノ側からの要望に応え、剣道指導者が派遣されました。現地での参加者は200人におよび、その後岩手に剣道を学びに来た方もいるそうです。

が不足しています。人々は熱心で、「武道」を理解しようという気持ちは日本人よりも強いと感じました。場所や道具がそろわないなどのさまざまな困難があることもわかりましたが、それにもかかわらず向上したいと強く願う人たちがいます。現地に長期間滞在して指導ができれば技術向上につながっていくだろうと感じました。

■盛岡クリケットクラブ

2006年、クリケットの文化を東北の地に広めようと外国人英語講師たちが設立。オンシーズンには毎月2回、盛岡の北上川公園や四十四田ダム野球場で練習をしています。
ホームページ
<http://moriokacricicket.wordpress.com/>

す。そこでベジタリアン向けのメニューも用意して、異なる文化の人どうしが楽しめるようにしています。

今後、より多くの人が参加し、みんなにもっとクリケットを知ってもらい、もっと交流が広がることを期待しています。年齢、国籍、性別、クリケットの腕にかかわらず、楽しめる場所でありたいと思っています。

クリケットのバットを両手にもって生まれてきた人も、クリケットって野球の複雑な変形?と思っている人も、盛岡クリケットクラブはあなたのためのクラブです。クリケットというスポーツを通し、楽しみながら交流していきます。